

国立国会図書館



ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和
身近な科学を楽しむ
国際子ども図書館の「科学あそび」

2012.1
No. 610

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の閉室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	★登録利用者限定のサービスです。	

■見学のお申込み／国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	※1階子どものへや、世界を知るへやおよび3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。		
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求受付	火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付	火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30		

■見学のお申込み／国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

C O N T E N T S

- 02 新年のごあいさつ 震災アーカイブの構築と新しいサービス
- 04 山路の雫 尾張藩の古武具研究
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 06 企画展示「ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和」
- 13 企画展示「ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和」から
近代の印刷技術 3 三色版・原色版、グラビア印刷、オフセット印刷とHBプロセス
- 16 言葉のエッセイ 最終回 世界言語の妄想
- 18 身近な科学を楽しむ 国際子ども図書館の「科学あそび」
- 23 「知識インフラ」の構築に向けて
「第三期科学技術情報整備基本計画」の策定

28 館内スコープ

科学技術情報流通の裏方

29 本屋にない本

○『最後の民権政治家 立川雲平』

○『「函館の貴重児童資料」論集』

31 ND L NEWS

○中国国家図書館との第30回業務交流

○第1回科学技術情報整備審議会

32 お知らせ

○デジタル化した蔵書26万5千冊が館内で利用できるようになりました

○「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス (Web NDL Authorities)」の本格サービス開始

○脚本アーカイブズ・シンポジウム「失われた脚本・台本を求めて～文化リサイクルの意義」

○国際子ども図書館春休み催物「子どものための絵本と音楽の会」

○平成23年度利用者アンケートの結果をホームページに掲載しました

○新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

新年の ごあいさつ

震災アーカイブの構築と 新しいサービス

国立国会図書館長 長尾 真



新年あけましておめでとうございます。

昨年は東日本大震災、その他いくつかの深刻なことが起こった大変な年でありました。今年は将来に希望を見出し、困難から力強く立ちあがるべくお互いに努力する年であると存じます。

この大震災に関しましては、被災地の汚損された資料の洗浄・復元のための技術指導に当館の職員を6度派遣し、また米国議会図書館から助けに来てくださった資料復元の専門家に仙台に行っていたき、被災地の資料復元に従事している人達に直接技術指導をしていただくなどをいたしました。

また、調査及び立法考査局では特別調査班を作り、震災に関する国会議員の皆様からの質問、調査要求に的確に答えるとともに、震災関連の報告書を数篇刊行いたしました。今年も復興に役立つ報告書をいろいろと出してゆくつもりであります。

国立の図書館として我々のなすべきことの一つの大きな課題は、この災害に関する各種の記録を収集しデータベース化して、復興のため、研究や教育のために提供するとともに、100年、200年先の人々の参考になるよう伝えてゆくことであり、昨年の5月以降震災アーカイブの構築の重要性を関係各省庁に呼びかけてきました。その結果、それぞれの所管する範囲の記録について収集し、これをデータベース化するという方向で計画が進みつつあります。当館では集められたこれら各種の記録のデータベースを横断検索して、必要とする記録データが取り出せるようにするポータル機能をもったシステムを担当する予定であります。この事業はこれから何年もかかるでしょうが、ねばり強くやってゆくつもりであります。

さて、すでに10年近く運用してきました当館の図書館業務と利用者の検索のためのシステム

は、システム概念そのものも古くなりましたので、今年の初めから抜本的に新しいシステムに入れかえて運用をはじめました。機能的にはずいぶん便利なものとなっていますので利用者の皆様にご満足いただけると考えております。

2009年から始めました大規模デジタル化事業は昨年3月に予定通り終了し、その結果過去のものを含めて約210万冊の資料がデジタル化されました。内容としては1968年までに刊行されたほぼすべての図書、1万2千種類の雑誌の創刊号から2000年までのもの、古典籍約7万冊、その他であります。これらは当館の所蔵する資料のうちデジタル化すべきものの約5分の1にあたります。デジタル化された資料は館内で閲覧できるほかに、著作権の切れたもの、著作権処理をしたものについてはインターネットに順次公開してゆく作業を進めております。

昨年10月には利用者の皆様により良いサービスを提供することを目的として、これまでの資料提供部と相談業務を中心としてきた主題情報部を統合して利用者サービス部といたしました。また図書館の活動を支える情報システムの持つ重要性がこれからはますます増大してゆきますので、電子情報部を新設いたしました。こうして、高度の電子図書館の構築、震災アーカイブをはじめとする「知識インフラ」の構築に向けて努力してゆこうとしております。

このような図書館システムの更新と組織変更によって、今年当館が新しい図書館として一歩を踏み出した年となりました。フレッシュな気持を持ち、国会へのサービス、国民の皆様へのサービスをより良いものとし、当館の使命を果たしてゆきたいと考えております。

今年もよろしくお願ひ致します。

山路の雫 尾張藩の古武具研究

大沼 宜規

江戸時代中・後期になると、古代の鎧や刀など武具の研究が進められた。松平定信が有名であるが、尾張藩もそうした活動が盛んであったようである。『山路の雫』は尾張藩士で古流故実伝（甲冑の着用や製作、武具に関する故実）を相承した国学者稲葉通邦（1744-1801）が譲り受けたり、書き写したりした研究資料など（一部は通邦の死後、息子通故が集めたもの）を24冊にまとめたものである。色々な覚書や図、その説明などからなるが、平安・鎌倉時代の鎧や刀を何枚もの紙に分けてほぼ原寸大に描いた図が含まれているのが特徴的である。写真1、2は「巖嶋神宝平重盛公御鎧図」（第10冊）のうち兜と胴の部分である。芸州侯浅野重晟から送られた原図を転写したもの。

稲葉通邦は社寺宝物のほか、廻村中や開帳時に見出したもの、売り物まで調査したようだが、同僚の学者山高信順（1736-1813）や「霜台君（霜台公子）」などの所持する貴重な図も多数転写していた。霜台とは弾正台の唐名であるので、霜台君とは第8代尾張藩主徳川宗勝の五男で弾正大弼に任ぜられ、高須松平家を継いだ勝当（1737-1801）のことであろう。勝当は「本邦武器の古製を知り、甲冑最も精し」¹と評され、武具に関する著作『兵械考証』²もある。上述の図も勝当を経て入手したのであろう³。通邦が第9代藩主徳川宗睦（1732-1799 勝当の兄）の世子治行（1760-1793）の命により勝当の図を書写した際の下絵も本書中に収録されている（第17冊「春日社所蔵古鎧之図」）⁴。

ところで、徳川宗睦の意向で模写・収集された武具の図や雛形が蓬左文庫に残されている⁵。それらのうち「平重

盛公御鎧図」（写真3）と写真2とを比べると、絵の出来は素人目にも月とスッポンであり、紐部分の違いもある。だが、揃いになっている他の図も含め、もとはともに寛政3（1791）年摸写したもので、寸法や内容などもほぼ一致するようである。このほか蓬左文庫の「南都興福寺所蔵義経鎧雛形」「甲州菅田天神祠所蔵楯無鎧之図」など、同じ武具を同様の図に描いたものも収録されており、互いの底本が同一とみられるものもある⁶。

こうした研究は実際の武具製作にも活かされていた。徳川宗睦所用の太刀に熱田神宮所蔵の兵庫鎖太刀を模したもの（この太刀の図も蓬左文庫と本書にある）、宗睦の息子たちの甲冑に義経の鎧の意匠を取り入れたものが残されているという⁷。稲葉通邦も大鎧の復原など実作を伴う活動をしていた。本書は、こうした深まり・広がりを見せていた尾張藩の古代武具研究のなかに位置付けることができよう。

大阪府立中之島図書館、名古屋大学附属図書館も『山路の雫』を所蔵するが、いずれも図は少なく、稲葉通邦が武具や服飾に関する言葉を歌書・物語・史書などから引用し編集した資料である。本書に似た図を含む資料としては、東洋文庫所蔵『稲葉通邦稿本』などもある。また当館は、通邦・通故による馬具の図集『鞍木鎧類聚』も所蔵している（本誌536（2005年11月）号「稀本あれこれ」参照）。

なお、2月12日まで、蓬左文庫で鎧図の展示会「よろいを写す一源平武将の装い一」が開催されているので、一見をお勧めしたい。

（おおぬま よしき 利用者サービス部人文課）

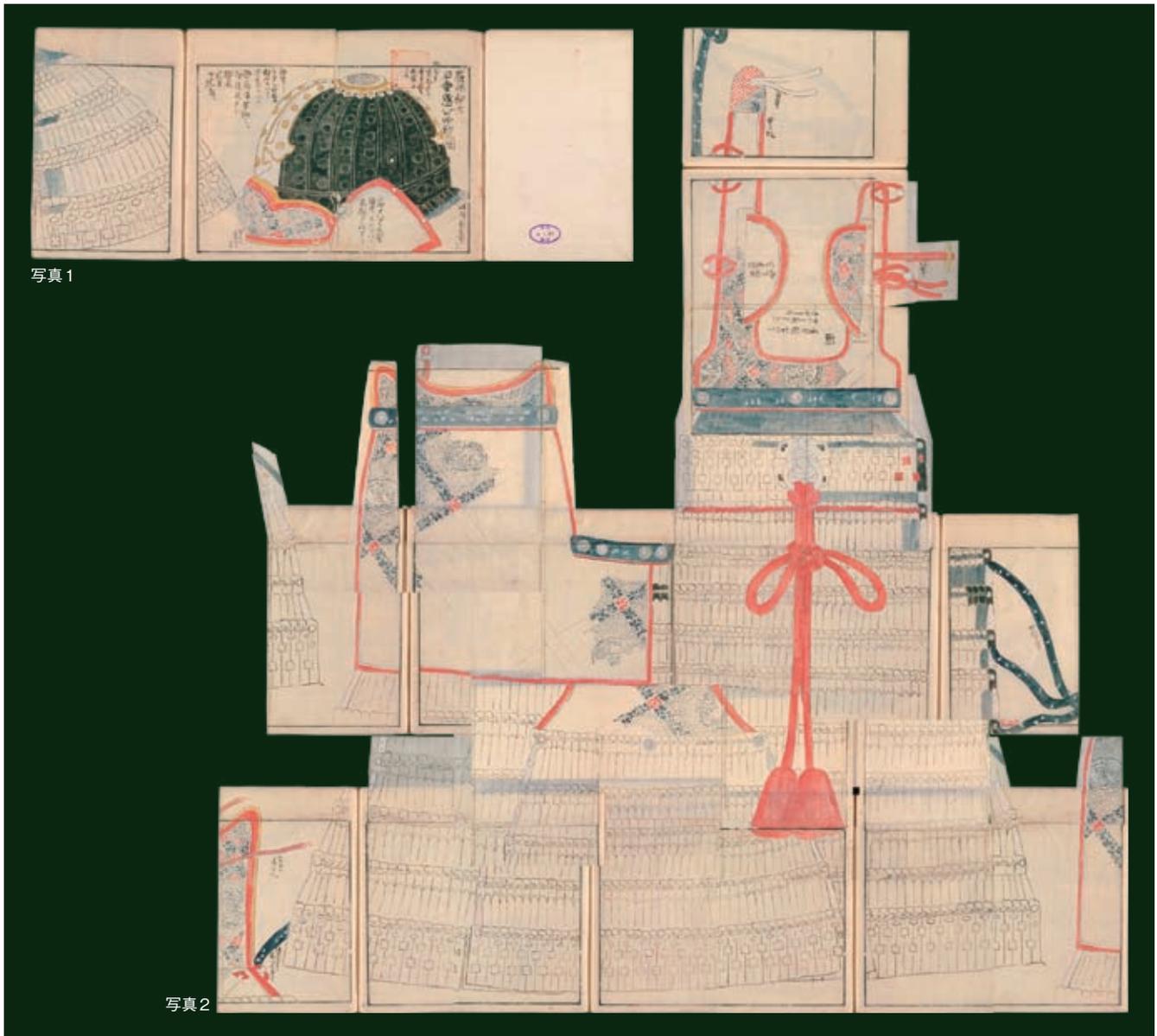


写真1

写真2



写真3

写真1 「巖嶋神宝平重盛公御鎧図」兜部分の上部（第10冊 見返し～第2丁表）兜の下部は、左側の淡彩の部分（第2丁表）とその裏に描かれている。本の大きさは各冊異なるが、この冊は29.0×19.9cm。

写真2 「巖嶋神宝平重盛公御鎧図」胴表部分（第10冊）貼り込まれた薄紙を鎧の形に並べ直し合成した。もともと部分毎に図を作成したらしく、貼り込んだときのズレもありびったりとは合わない。なお、写真1の兜、本図のほか、胴裏（本図左下にわずかに写り込む）、袖などの図も含めて揃いの図となるが、省略した。

写真3 蓬左文庫所蔵「平重盛公御鎧」（胴部分）

注

- 1 『名古屋市史 人物編第一』（愛知県郷土資料刊行会 1980）p.81
- 2 蓬左文庫本に著者は記されていない。凡例に「五味貞之カ古流故実伝ニ拠」とある。五味貞之は、尾張藩士で古流故実伝を立てた人物。通邦は五味の孫弟子に当たる。
- 3 同じく寛政3年に芸州侯から届いた記載のある「巖嶋神宝」（第23冊）は、寛政12年に霜台君の図をもとに書写されたものである。
- 4 「興福寺西庫所蔵古鎧」（第17冊）、「秩父重忠鎧之図 春田丹波所持」（第21冊）も治行の命を受けて山高信順が模写した際の稿本の写しである。
- 5 奥出賢治「蓬左文庫所蔵 鎧雛形」『桃花園大学文学部研究紀要』（13）pp.123-132
- 6 「南都興福寺所蔵義経鎧雛形」と本書第14冊の同名の資料は、幕府御用絵師板谷慶舟（住吉内記）所蔵の雛型を異なる年に書写したものである。「甲州菅田天神祠所蔵楯無鎧之図」は本書第22冊の「盾無鎧」と図の内容や形が一致し、添付された書付も「霜台君御書付」として写されている。本書の写しにある「袋印」が蓬左文庫本の袋にはなく、直接の転写関係ではないと思われる。
- 7 徳川美術館編・刊『尾張の殿様物語』（2007）p.56

山路の雫 稲葉通邦写
24冊 28～30 cm
〈請求記号 831-10〉

※東京本館古典籍資料室所蔵

企画展示

ビジュアル雑誌の 明治・大正・昭和



2月から開催する「ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和」は、
国立国会図書館の膨大な蔵書の中から、ビジュアル表現が特徴的な雑誌を集め、
大衆文化を縦糸に、印刷技術を横糸に構成した展示会です。
印刷史の貴重な足跡を伝える展示の一部を誌上でご紹介します。

左から『婦人グラフィック』第3巻第5号 大正15（1926）年5月 国際情報社 <請求記号 雑51-38> 【木版】 *館内でデジタル画像を閲覧可能。
『風俗画報』118号 臨時増刊「大海嘯被害録 上巻」 明治29（1896）年7月10日 東陽堂 <複製版請求記号 Z11-604> 【平版（石版）】
『満洲上海大事業画報 第3輯』（『国際寫真情報』特輯号） 昭和7（1932）年3月1日 国際情報社 <マイクロフィルム請求記号 YA-1272> 【原色版】

東京

平成24年2月1日(水)～3月2日(金)

10:00～19:00 (土曜日は18:00終了)

国立国会図書館 東京本館 新館展示室
(東京都千代田区永田町1-10-1)

関西

平成24年3月9日(金)～28日(水)

10:00～18:00

国立国会図書館 関西館 大会議室
(京都府相楽郡精華町精華台8-1-3)

入場
無料

いずれも日・祝・第三水曜日は休館



テレビもインターネットもない時代、雑誌は貴重なメディアでした。単行本よりも早く、新聞よりもまとまって、たくさんの情報を定期的に伝えてくれる雑誌。特に、絵や写真といったビジュアル面で、雑誌は人々の「見たい」という期待を一身に背負っていました。災害、戦争といった国をあげての一大事、皇族や著名な俳優の顔、ファッション、子ども向けの童話や絵、美術、写真……。明治・大正・昭和の雑誌には大衆文化とともに、人々の心をとらえたビジュアル表現が華開いています。

また、「よりリアルなものが見たい」という要望に応え、印刷技術も進化しました。絵から写真へ、白黒からカラーへ、より多く、より速く。現代ではもう使われなくなった技術もあれば、現代

の技術につながる大発明もありました。雑誌を舞台として、ビジュアル表現のための印刷技術も試行錯誤が重ねられました。

第1部 ビジュアル雑誌を支えた印刷技術

江戸時代の出版物は木版で刷られていましたが、明治になり欧米の技術が入ってきたことによって、様々な技術が用いられました。

現在では、電子的に製版し、オフセットで印刷した印刷物がほとんどですが、それに至るまで、実にさまざまな技術が使われていました。それらの仕組みについて、本誌連載「近代の印刷技術」（本誌13～15ページ）でご紹介した誌面を展示します。



『印刷雑誌』 第8巻第12号
明治32（1899）年1月 印刷雑誌社
＜請求記号 雑35-250＞
田中猪太郎による「猿まわしの図」（部分拡大）。日本で初めて色分解（原稿を赤・青・黄色の三原色に分解すること）で作成された印刷物の一つ。【三色版】
＊館内でデジタル画像を閲覧可能。

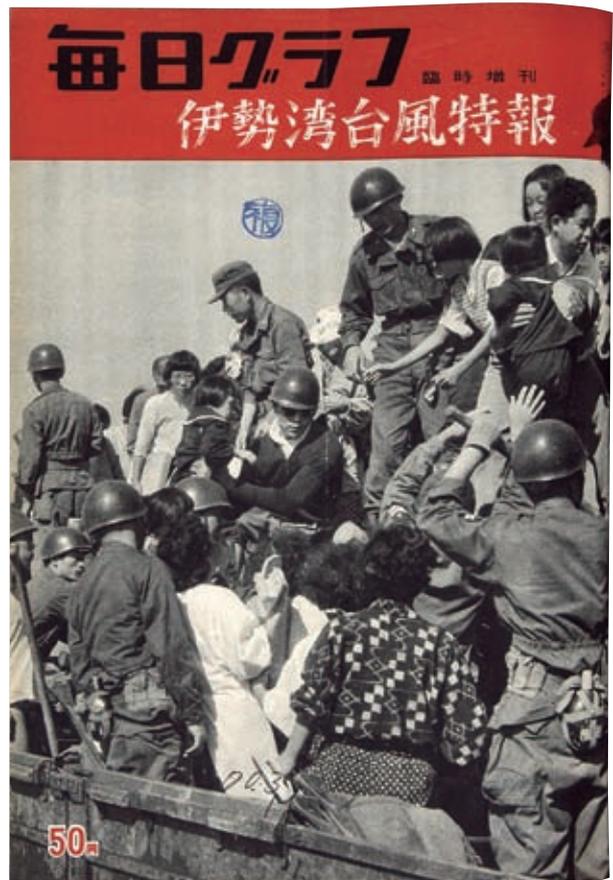
『团团珍聞』 7号
明治10（1877）年5月5日 团团社
＜複製版請求記号 Z13-2488＞
印刷技師梅村翠山が創設した彫刻会社による表紙（部分拡大）。詳しくは本誌608（2011年11月）号「近代の印刷技術」参照。【金属凸版（手描き腐食式）】

『三越』 第1巻第2号
明治44（1911）年4月 三越呉服店
＜請求記号 雑23-23イ＞
橋口五葉による石版三十度刷りの表紙（部分拡大）。詳しくは本誌609（2011年12月）号「近代の印刷技術」参照。【多色平版（石版）】
＊館内でデジタル画像を閲覧可能。



この記事の写真のキャプション中、
【 】は用いられた印刷技術を示します。

展示会場では一部の雑誌を実際に
ルーペで拡大して見るができます。



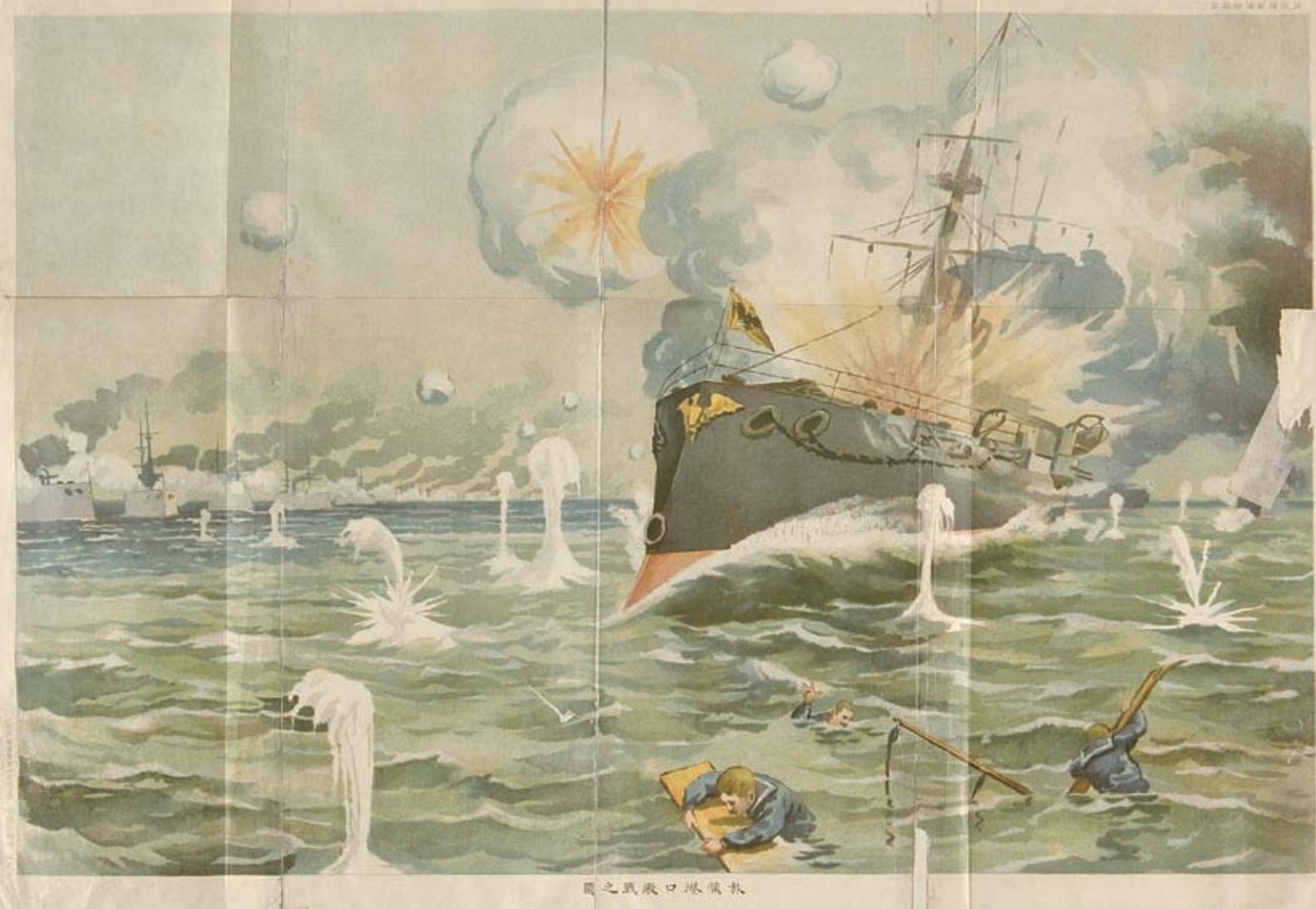
第2部 ビジュアル雑誌の展開

■災害

雑誌は、災害のありのままの姿を伝えてきました。幕末動乱の最中に起きた安政大地震のかわら版記事『江戸大地震之絵図』から、明治29（1896）年の三陸地震津波（6ページ中央写真）、関東大震災、伊勢湾台風、阪神・淡路大震災、そして、平成23年3月の東日本大震災までをご紹介します。写真が実用化されていない時代は、^{こくち}木口木版や石版で災害の様子を表現していました。写真が実用

化されてからは、まずはモノクロで撮影され、次第にカラーに進化します。また、ヘリコプターでの撮影も行われるようになります。展示会場では、視覚に訴えたさまざまな報道記事を、印刷や写真の技術発展とからめて、比較してご覧になれます。

- 左 『関東大震災画報』（『写真時報』第1巻第8号）写真時報社
大正12（1923）年10月1日 <請求記号 415-30>
『吉原焼跡見聞記』【グラビア印刷】
* 「近代デジタルライブラリー」でモノクロ画像を閲覧可能。
- 右 『毎日グラフ 臨時増刊 伊勢湾台風特報』毎日新聞社
昭和34（1959）年10月15日 <請求記号 Z23-6>
【グラビア印刷】
* 展示会場ではパネル展示。



旅順海戦口激戦図

■戦争

近代以降、印刷技術が発達していくことで、よりビジュアルな戦争報道がなされました。日清戦争の際には、写真が初めて雑誌に使用されました。日露戦争では、写真の使用が大幅に増え、関連雑誌が大量に出版されました。しかし、戦いの様子はまだ絵で描かれています（上写真）。生々しい戦

場の様子を撮影できるようになるのは、カメラの小型化を経た、日中戦争、第二次世界大戦からです。この時期は、写真のトリミング技術なども発達し、デザイン的にすぐれた雑誌が多数生まれました（11ページコラム参照）。展示会場では、日清戦争から第二次世界大戦まで、戦争ごとの雑誌報道の変遷をたどります。



上 『日露戦争時事画報』第1号 明治37（1904）年3月13日 時事画報社

<請求記号 雑53-7>

口絵 松本現生画「旅順海戦口激戦図」

【平版（石版）】

下 『日露戦争実記』第1編（7版）明治37（1904）年2月20日博文館 <請求記号 雑53-8>

口絵「旅順海戦聯合艦隊司令長官と艦旗」

【網目写真版】

* 2誌とも館内でデジタル画像を閲覧可能。

■ グラフ誌

グラフ誌とは、報道を主たる目的として、写真や絵を中心に、見て楽しむ総合雑誌のこと。初めて「画報」と名乗った『風俗画報』、国木田独歩の『近事画報』を皮切りに、明治から昭和にかけて、日本にはさまざまなグラフ誌がありました。家庭生活から国際情勢まで、幅広く時代を映す鏡となっています。



左 『日曜画報』 第1巻第8号 明治44 (1911) 年2月19日 博文館

<請求記号 雑54-62> 【平版 (石版)】

右 『国際写真新聞』 第1号 昭和8 (1933) 年2月22日 新聞聯合社

<請求記号 雑53-53> 【グラビア印刷】

* 2誌とも館内でデジタル画像を閲覧可能。

■ ファッション

ファッション誌は、明治、大正期には存在していませんでした。昭和初期に服飾専門の雑誌が創刊、戦後には、洋裁学校が洋裁専門雑誌を創刊して、庶民も流行を追うようになります。展示会場では、ファッション誌の前身ともいえるデパートの広報誌から、宇野千代の『スタイル』、中原淳一の『ソレイユ』、そして「ファッション誌」というジャンルを成立させたといわれる『an・an』『non-no』までを取り上げます。



『ル・シャルマン』 1巻1号 昭和10 (1935) 年9月 興文社 <請求記号 VG1-400> 【オフセットか】

* 布川文庫 (東京本館人文総合情報室所蔵) に収録。

* 展示会場ではパネル展示。



フ ロ ア
レクチャー

東京 2月4日 (土)、2月9日 (木)、2月17日 (金)、2月25日 (土)
関西 3月10日 (土) いずれも 14:00 ~ 予約不要。受付にお集まりください。



■人

話題の人がどんな顔かたちなのか、気になるのは昔も今も同じでしょう。明治20年代には網目写真版やコロタイプで写真を紙に印刷できるようになり、たくさんの「人」が新聞・雑誌に登場するようになりました。皇室、名士の肖像から、芸者アイドル誌や映画雑誌、戦後の『平凡』『明星』、テレビ雑誌まで、展示会場では雑誌に現れた様々な「人」をご紹介します。



『グラフィック』第1巻第1号 明治42(1909)年1月1日 有楽社 <請求記号 雑53-13> 巻頭「名妓萬龍の百姿」芸妓萬龍(1894-1973)を「東京第一の名妓ですから、従て日本第一の美人との推定が出来る」と紹介している。
*館内でデジタル画像を閲覧可能。
*展示会場では説明パネルの挿絵として使用。



見せたい日本

昭和6(1931)年9月の満州事変以降、日本は国際連盟を脱退し、国際的に孤立を深めていました。政府は、日本の正当性を世界へアピールするために、様々な戦略を練りました。対外グラフ誌の創刊もその一つです。『Asahigraph』など、これらの対外グラフ誌には、日本の伝統的な風景と、先進的な都市の様子などが掲載されています。



第二次世界大戦開戦前後から発行された『FRONT』は、日本軍の強さを諸外国にアピールする雑誌です。採算を度外視して人材や資金が投入されたため、デザイン史上にすばらしい成果を残しました。国内向けには、戦果を華々しく伝える『写真週報』が刊行されました。占領地では現地語で発行された雑誌も多数あり、日本の友好的態度をアピールしていました。

ビジュアル雑誌は、「見たい」という読者のためだけでなく、出版する側の「見せたい」という動機によっても、刊行されていたのです。

上 『Asahigraph overseas ed.』vol.1 no.4 1933
Asahi Shimbun Pub. Co.<請求記号 Z52-C529>
【グラビア印刷】

下 『写真週報』第200号 昭和16(1941)年12月24日
内閣情報局 <復刻版請求記号 Z23-634>
【カラーグラビア印刷】

*写真は布川文庫(東京本館人文総合情報室所蔵)に収録されているもの。



■子ども

子ども向け雑誌が登場するのは、明治20年代になってからのことです。当初は啓蒙的な読み物が中心でしたが、徐々に挿絵や写真が増え、やがて図版を中心にした絵雑誌が花形となっていきました。展示会場では、漫画雑誌にいたるまでの、子ども向け雑誌

の移り変わりをご紹介します。

『コドモノクニ』第9巻第5号 昭和5（1930）年5月 東京社
＜請求記号 Z32-B158＞ 本田庄太郎画 【オフセット】
*館内でデジタル画像を閲覧可能。

■美術、写真

美術雑誌では、作品の再現のため、ほかのジャ

ナルに比べて早くから高度な印刷技術が使われています。

写真では、大正時代に誕生したアマチュア向け雑誌、昭和初期には新興写真運動、戦後のカメラ雑誌ブームと、写真史と雑誌は切り離せません。

第3部 あの人気雑誌の創刊号



『反省會雑誌』第14号
明治22（1889）年1月
反省會本部
＜マイクロフィッシュ
請求記号 YA5-54＞
現在の『中央公論』。

町の書店やコンビニエンスストア、駅の売店などで誰もが一度は目にしたことのある雑誌の創刊号をご紹介します。総合誌、週刊誌から、趣味の雑誌、漫画雑誌まで、今とあまり変わらないものもあれば、デザインや体裁はもちろんのこと雑誌の性格までが変わってしまったものもあります。時代の変化や印刷技術の進化をご覧ください。

（展示委員会企画展示小委員会）



左 『明星』第1次11号 明治33（1900）年2月 東京新詩社 <請求記号 雑8-28> 藤島武二画 【網目写真版】
右 『カメラ』1巻1号 大正10（1921）年4月 アルス <請求記号 雑35-205>
*館内でデジタル画像を閲覧可能。展示会場ではパネル展示。

企画展示

「ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和」から

近代の印刷技術

3

三色版・原色版、グラビア印刷、
オフセット印刷とHBプロセス

平成24年2月から3月に開催予定の展示会「ビジュアル雑誌の明治・大正・昭和」(詳しくは本誌6～12ページ参照)から、雑誌のビジュアル表現を支えた様々な印刷技術をご紹介します。



三色版・原色版

仕組み

イエロー、マゼンタ、シアンの3色で色を表現する手法。この3色に黒を加えたものは原色版と呼ばれる。3色(または4色、以下同)のフィルターを通して撮影することで画像を3色に分解し(色分解)、各色ごとの版を重ねて刷り、色を再現する。色分解の仕組みはどの版型でも使用されるが、「三色版」「原色版」と呼ぶのは凸版である。

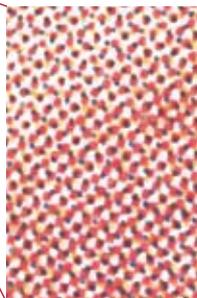
由来

1802年にドイツのヤング(Young, Thomas 1773-1829)が、人間の視神経が赤・緑・青紫の三原色光の刺激の変化の度合いに応じて様々な

色を感知するという仮説を発表し、ヘルムホルツ(Helmholtz, Hermann von 1821-1894)がそれを継承した。英国のマクスウエル(Maxwell, James Clerk 1831-1879)は1881年、色分解して作った3色の映像を重ね合わせて被写体の天然色を再現し、この説を実証した。さらにフランスのデュオーロン(Ducos du Hauron, Louis 1837-1920)が、この三原色説を応用して、白色光から特定の色を除去して色彩を表現する減色法を発明し、シアン・マゼンタ・イエローの三原色による印刷物を作り出した。

特徴

3色のインキでカラー印刷が可能となり、多色石版に比べ、はるかに少ない労力で済むようになった。ただし、色を正確に表現することは難しく、初期は色の偏りが見られる。色分解の原理は現在も使われている。



『少女界』第10巻第6号(臨時増刊 10周年記念号) 明治44(1911)年5月 金港堂書籍 <請求記号 VG1-102> 口絵「愛猫」米国の画家セリンジャー(Selinger, Jean Paul 1850-1909)のサインがある。初期の三色版は赤が強く出ているものが多い。

(右は赤枠部分の拡大)

* 布川文庫(東京本館人文総合情報室所蔵)に収録。

『少年界』の姉妹誌で、日本で最初の少女専門誌。創刊は明治35(1902)年4月。読み切りの読み物を掲載し人気があった。明治37年前後から神谷鶴伴(1874-没年不明)が編集主幹となり、口絵写真を増やしたり、「少女文学」の項を設けたりと紙面の刷新が図られた。月刊。



グラビア印刷

仕組み

凹版。「フォトグラビュール」とも呼ばれる（グラビュールはフランス語で「彫る」の意）。網目のスクリーンを通して焼き付ける手法は網目写真版（前号参照）と同様。版のくぼみ部分にインキを刷り込み、余分なインキを落としてから、紙にプレスする。ドットの大小で濃淡を表現する網目写真版と異なり、インキの量により濃淡を表現する。

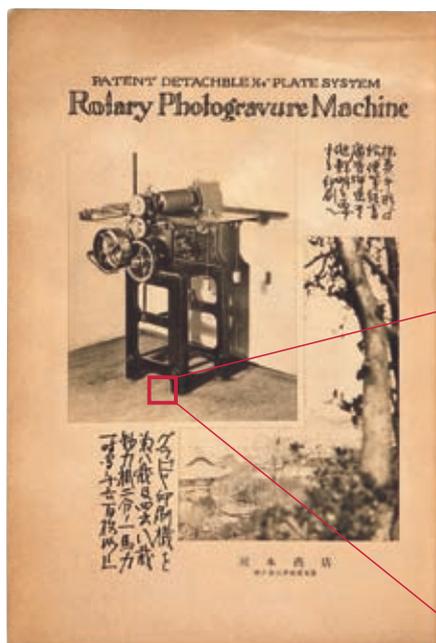
由来

チェコスロバキアのクリツチュ（Klíč, Karel 1841-1926）が1879年に発明。日本でモノクログ

ラビアが実用化されるのは大正末期から昭和初期頃、カラーグラビアが雑誌に使用されるようになるのは昭和30年代以降である。雑誌の写真ページが、オフセット印刷であっても「グラビア」と呼ばれることが多いのは、雑誌の写真ページにグラビア印刷が多く使われていたことの名残である。

特徴

拡大すると、格子状に見える。インキの量で濃淡を表現するため、濃く深みのある写真を刷ることができる。文字の印刷にはあまり適さない。1枚の写真を精密かつ大量に印刷するのに優れているが、プレス工程が必要なため、大がかりな設備を必要とする。ビニール袋や木目調の家具などの印刷にも幅広く用いられている。



『印刷時報』 第6号 大正15(1926)年6月 大阪出版社 <請求記号 雑35-254>グラビア印刷による、瀬本商店のグラビア印刷機の広告。(中央は赤枠部分の拡大)
*館内でデジタル画像を閲覧可能。

『印刷時報』は印刷業界誌。大阪出版社の創業者・島屋政一（生年不明-1952?）は、『本木昌造伝』を著すなど関西の印刷界に大きな影響を与えた人物。同じ業界誌である東京の『印刷雑誌』に比べ、広告が占める割合が大きいのが特徴である。月刊。



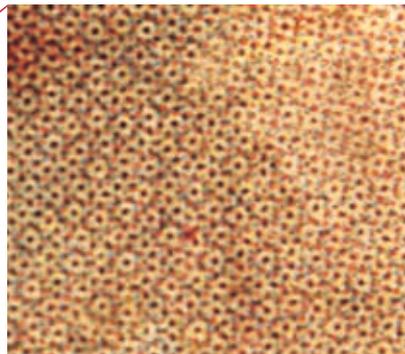
オフセット印刷とHBプロセス

仕組み

オフセット印刷は、平版を直に印刷するのではなくブランケット(転写体)に転写したうえで印刷する方式。版から紙までに2回転写されるため、描画が反転されず、そのまま印刷される。HBプロセスは写真製版技術の一つで、色分解(13ページ「三色版・原色版」参照)できあがった湿版のすりガラスに直接色のレタッチ(修正)を行う方式。これによりオフセットでのカラー印刷が簡便になり、「プロセス平版」と呼ばれて一時代を築いた。

由来

1904年、アメリカのルーベル(Rubel, Ira Washington 1846-1908)がオフセット印刷を発



明。アメリカのヒューブナー(Huebner, William 1886-1966)とブライシュタイン(Bleistein, George 1861-没年不明)により技術の改良が図られ、HBプロセスと呼ばれるようになった。日本では大正期にオフセット印刷機が伝わった。オフセット印刷は現在も主流の印刷技術だが、HBプロセスはカラーフィルムが原稿として使われるようになる昭和35(1960)年頃にその役目を終えた。

特徴

平版は凹凸がないために丸い形に整形しやすく、輪転機に向いている。また、版から直接は刷らないために版の耐久性が高く、10万枚単位で印刷できる。そのため、高速かつ大量の印刷が可能となり、表紙がカラーの雑誌が増加した。当時に多い、絵のように見える人工的なカラー写真はレタッチによるもので、画像の色合いを手作業で修正する、レタッチマンと呼ばれる職人が活躍した。

(展示委員会企画展示小委員会)

『キング』第1巻第1号 大正14(1925)年1月 大日本雄弁会講談社<マイクロフィッシュ請求記号 YA5-103> 和田英作(1874-1959)による表紙。

(中央は赤枠部分の拡大)

*写真は布川文庫(東京本館人文総合情報室所蔵)に収録されているもの。<請求記号 VG1-249>

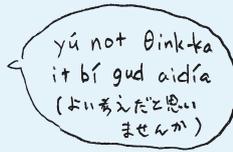
廉価販売と大量印刷で、日本初のミリオンセラーとなった雑誌。その背景には書店への積極的な営業攻勢もあった。想定する読者層は大人から子供まで、家庭に1冊を目指した。月刊。

言葉のエッセイ

最終回 世界言語の妄想

人類共通語としてエスペラント語が作られたのは、ご承知のとおりである。エスペラント語は勉強したことがないので、どの程度覚えやすいのか、わからないが、今回は、各国語の長所を取り入れた筆者独自の世界共通語の構想を冗談半分で発表したい。

英語がかなり普及しているので、ベースは英語にするが、表記はローマ字ベースとする。母音は、アイウエオに限定し、長音は、ハンガリー語の「á」「é」「í」「ó」「ú」を使う。二文字で一つの子音を表すことはやめて、同じ音を一文で表している言語から借用する。たとえば、「sh」は、チェコ語やリトアニア語の「š」を使う。大文字小文字両方覚える手間を省くため、すべて小文字にする。



格変化は面倒なので、日本語のように格助詞で表すことにする。すなわち、直接目的語を表す場合は、日本語の「を」(とりあえず「o」と表記)を使う。疑問文は、英語みたいに助動詞を使わないで、平叙文に日本語の「か」を末尾につけることにする。そうすると「Do you speak English?」は、「yú spík ingliš-o-ka」となる。

動詞の人称変化はなくす。前置詞もなくし、日本語の格助詞を使う。「Where does he come from?」は、「wea-kara hí kam-ka」となる。

関係代名詞は、日本語、中国語など存在しない言語もあるが、多くの言語で使っているので、

採用する。多くの言語では疑問詞やそれに準じる語を関係代名詞に使っているが、簡略化するため、英語の「that」に限定する。有声の「th」を一文字で表すため、アイスランド語の「ð」を採用する。冠詞は、持たない言語もあるのでなくす。過去形は不規則変化なしに全部「d」をつけることで済ませる。そうすると、「This is the book that I bought yesterday.」は、「ðis bí buk ðat-o ai baid yestadei.」となる。

過去の継続的な状態を表すときは、be動詞過去形+現在分詞という面倒な規則をなくし、動詞にイタリア語の半過去三人称単数形の語尾

「-ava」をつけることにする。最初の「a」

は、長音なので、「á-ava」と表記する。そうすると、「I was listening to music.」は、「ai

lisnáva myúzik-o.」となる。

仮定法、接続法といった非現実の状態を表す態は、面倒なのでなくす。未来や可能性を表す助動詞は採用し、基本的に英語のものを使う。したがって、未来は「wil」+動詞となる。「bird」の「ir」のようにローマ字でうまく表せない母音があるときは、別の言語から単語を選んでくる。どこでもいいが、一音節で覚えやすいので、仮にポーランド語の「鳥」,「ptak」にしてみよう。そうすると、「If I were a bird, I would fly to you.」は、「If ai bí ptak, ai wil flai yú-tan.」となる。「tan」は、「~のところ」を表すグルジア語の後置詞を使ってみた(厳密には正確な

用法ではないかもしれないが、まあその辺は大目に見てください。

これが筆者の考案した世界共通語のさわりである。英語中心主義的だが、国際色豊かな感じもする。が、これが採用されることはまずないであろうとは筆者も思うところである。

* * *

図書館とは、知の集積庫であり、人間特有の意思疎通手段である、言語による創作物を収集する場です。言語の面白さを多くの方々に共有していただきたいとの思いから、言語に関するエッセイを執筆しました。

しかしながら、筆者は言語学の専門家ではないため、これまでの連載でいくつかの誤りを識者の方からご指摘いただきました。次のとおり、訂正します。

第4回：ドイツ人のフランス語名は、他の言語に合わせて男性単数形の「Allemand」が適当でした。

第5回：スペイン語の「ch」「ll」は、現在では一文字として扱わないのが一般的です。また、リトアニア語の「y」と「i」は厳密には同じ音ではなく、前者が長母音、後者が短母音です。

第6回：北に行くほど母音の種類が多いというのは、ヨーロッパ言語に見られる一般的傾向に過ぎず、例外はたくさんあります。また、現在は、韓国・朝鮮語、日本語はアルタイ語族に含めないのが通説です。

第7回：韓国・朝鮮語では、「ビジネス」は「ビジネス」等と表記するのが適当でした。

また、読者から言語の学習方法についてのご質問も受けました。話せるようになりたいなら、現地で生活するのが何よりの学習方法であると思いますが、筆者のように読むことを目的とするなら、とにかく文法書を丁寧に粘り強く学習するしかありません。学習を継続するには楽しみがなくてはなりませんので、自分の興味のある分野の文献を読むのがいいでしょう。

筆者は、調査及び立法考査局で憲法を調査している者です。もともと憲法や政治制度に関心があるため、その分野の文献をよく読みます。知っている分野の本だと、大体文脈で読めてしまうことがあるので、一言一句辞書を引くという苦痛を避けることができます。理解度30パーセント程度でも、1冊の本を読み通すと何ものにも代えがたい達成感があり、その言語の習熟度も上がります。

次は何語に挑戦するののご質問もありました。筆者の語学熱には最近ムラがあり、今は停滞期なのですが、それが明けたら、ラトヴィア語とエストニア語に挑戦したいと思っています。バルト三国と一括りにされてしまうことが多いのですが、この二つ実は全然違うんですよ。



マニアシュヴィリ
自画像
(いけてない)

(ゴガク・マニアシュヴィリ)

身近な科学を楽しむ

国際子ども図書館の「科学あそび」

科学あそびは、子どもが科学実験や工作を通じて科学に親しむイベントとして、図書館や学校、科学館や児童館などさまざまな場所で行われています。図書館での科学あそびは、科学だけでなく、科学の本に親しむことを目的としています。

国際子ども図書館では、全面開館した平成14年からほぼ毎年、夏休み期間に科学あそびを実施しています。ここでは、平成23年7月30日、31日に行った「科学あそび2011 宇宙ってどんなところ？ 月の形がわかる早見盤をつくろう」についてご紹介します。



★ 科学と本に親しむテーマ選び 企画・準備

「科学あそび2011」では、講師を科学読物研究会の坂口美佳子先生にお願いしました（20～21ページ コラム参照）。

科学あそびの企画は講師と職員が協同で行います。子どもに身近なテーマや素材であることが前提で、国際子ども図書館ではさらに、参加者の年齢、大量の水や火は使えないことなどを考慮しています。この10年間で風船、磁石、電気、ドラ

イアイスなどをテーマに多様な科学あそびに挑戦してきました。今回は、小惑星探査機「はやぶさ」が話題になったこともあり「宇宙」をテーマとして、月齢早見盤を作成することにしました。また、職員が本を紹介する「ブックトーク」を行い、じっくり読書したい子どものためにブックリストを作成して配布することにしました。当日は器具を使った実験を行うので、事前に安全上の注意点などを把握しておきます。

2日間のイベントには多くの応募があり、抽選で各日約40名の参加者が決まりました。小学校1年生から中学生まで、年齢はさまざまです。

★ 科学のおもしろさを伝える 当日

「科学あそび2011」の内容は下のプログラムのとおりです。事前に子どもに結果を予想させてから実験を試みるのが特徴です。

まず子どもたちは「宇宙はどんなところかな？」と考えて、思いついたことを書き出してみました。少し難しかったようですが、高学年では空気が無いことを書く子もいました。そして、地球や土星などの模型を持ってきて、惑星の大きさ、並び方、構成物質などについて講師の説明を聞きました。

次に、地球から国際宇宙ステーションや太陽な

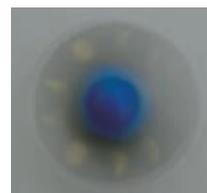


どへの距離を予想してみました。これはかなり難しかったようです。講師がアメリカやロシアの月面着陸や宇宙飛行士の話をすると、「アポロ」や「はやぶさ」など、知識の豊富な子が手を挙げて発言する場面もありました。

それから、真空がどのような状態なのか、密閉容器を使った実験をしました。容器に①菓子袋、②温度計、③音が鳴っているブザーをそれぞれ入れて、容器から空気を抜いていくと、中身はどのようなになるのか、結果を予想し、容器の中身の変化を観察しました（結果は下）。

次は月齢早見盤の工作です。早見盤ができると、自分の生まれた日などの月の形を調べました。それから、地球の周り

を月が公転する様子がわかる「3Dコマ」をフィルムケースで



コマを回すと、地球と満ち欠けする月のように見える（右）

職員によるブックトークでは、月のクレーター
実験結果 ①ふくらむ ②温度が下がる ③音が小さくなる

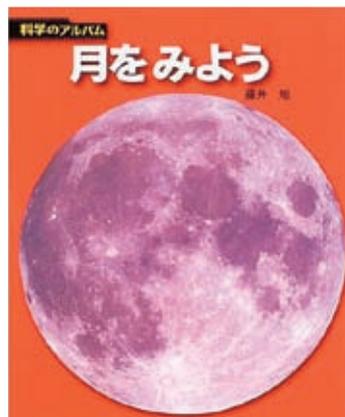
宇宙ってどんなところ？

～月の形がわかる早見盤をつくろう～

<プログラム>

1. 質問1：宇宙ってどんなところ？
2. 質問2：惑星と惑星との距離は？
3. 実験：真空状態での実験
①気圧の変化 ②温度の変化 ③音の変化
4. 工作1：月齢早見盤
5. 工作2：3Dコマ
6. 本の紹介、ブックトーク

の見え方を取り上げました。日本では月にうさぎがいるといわれますが、世界のいろいろな地域で、月のクレーターの見え方は違うようです。『月をみよう』では、月のクレーターをカニや女の人に見立てる国のあることが紹介されています。『月へミルクをとりに行ったねこ』はスウェーデンのお話で、月の模様をおじいさんとおばあさんがミルクの桶を運んでいるように見立てた絵本です。



藤井旭著『月をみよう』
あかね書房 2005
(新装版)
<請求記号
Y11-N05-H516>

子どもの心に寄り添って

坂口 美佳子

科学あそびをはじめのきっかけ

東京都練馬区の石神井公園の近くに「わかば科学クラブ」がありました。故名倉弘さん主宰の「仮説実験授業」という方法（1963年に板倉聖宣氏が提唱した科学教育法で、授業書に基づいて問題・予想・討論・実験を行いながら真理をさぐるもの）による、子ども向けの科学クラブです。そこに2人の息子と12年ほど通いました。あるとき、名倉さんが体調を崩して、代わりに私が子どもたちと仮説実験授業を行ったのです。それが科学あそびをはじめたきっかけです。



「ものにはすべて重さがある」ということを確かめる実験をしてみました。1kgのジュースを飲んで——これはかなり大変なのですが——体重を計りました。もちろん1kg体重は増えましたが、原子でできているものには、すべて重さがあるということ、身をもって知ることが大切なのです。そうしているうちに、科学の楽しさ、知らないことを知る楽しさ、わからないことがわかる楽しさのとりこになっていったのです。

それから四半世紀、今では、科学あそびを年に200回以上行っています。科学あそびの対象で、もっとも多いのは小学生で、図書館・公民館・児童館の事業として行っているほか、小学校の授業や行事として行うこともあります。

さらに、公立中学校の選択理科の授業として行うこともあります。また、大学で、いかに科学を伝えるかという授業をしたり、科学あそびのリーダーを養成する講座を持つこともあります。一般の大人の方を対象とすることもありますが、大人の方にとっても楽しんでもらえるようです。

知ることの前に感じること

私は必ずしも科学が得意ではなかったので、自分の子育ての中で、子どもの質問に科学的にこたえられない不安をいつも抱えていました。

しかし、レイチェル・カーソンの著書『センス・オブ・ワンダー』（新潮社 1996）の中にあった「知ることとは、感じることの半分も重要ではない」という言葉に出会ったのです。「そうだ！ 私が科学あそびをする意味があるとすれば、子どもの気持ちに共感することだ」と強く思うようになりました。

金属がなぜ電気をよく通すのか説明することより、まず一緒に「ワ～、お砂糖のアラザンも電気を通すんだ！」と共感することのほうが、大切なのです。大人が子どもに寄り添って共感することが、子どもの励みになり、自信を育てるのです。

共感すること

私が科学あそびでいちばん大切にしていることは、「共感すること」です。宇宙の科学あそびでも、「宇宙ってど



アルフレッド・スメード
ベルイ作 菱木晃子訳
垂石眞子絵『月へミルク
をとりにいったねこ』
福音館書店 1996
<請求記号

Y18-11211>

んなとこ？」という私の問いに、子どもたちは思いつく限りのことをつぎつぎに声に出してくれます。「宇宙人がいる」などという的外れの発言でも、「う〜ん、なるほど、わたしたちも宇宙人！」と、子どもの言葉を大切にします。「親でも学校の先生でもない大人が共感してくれた」という体験をしてもらうために、子どもの声を引き取る問口の広さ、ある意味でのいい加減さが必要なのかもしれません。すると、それまで慎重に模様眺めをしていた子どもたちも、次々に意見を出してくれるのです。実験する前に、子どもたちに予想をたててもらい、なぜそう予想したかを聞きます。子どもたちは、実にさまざまな意見を言ってくれます。そのときも、たとえ見当違いな意見でも、「なるほど、おもしろい意見、初めて聞いた！」と引き取ります。

実験して、予想が当たった子どもたちは「やった〜」と大騒ぎですが、正解すればいいということではありません。大事にしたいのは、自由に自分の意見が言えること、他の人の意見を聞けること、自分や他の人のすばらしさに気づくこと、実際に実験してみることです。その中で、子どもたちに「予想すること」「どうしてだろうと思うこと」「実際にやってみること」の楽しさを味わってほしいと思っています。

科学の本と科学あそびは車の両輪

以前に読んだ科学の本が、ある日、今日の体験につながる場合があります。逆に、以前体験したことが、今日読ん

本の紹介とともに、自分で作った月齢早見盤で満月の日を調べて、月の模様も観察してみれば、と案内しました。終了後、子どもたちは本を熱心に見ていました。当日配布した、宇宙に関する子ども向けのブックリストは次頁をご覧ください。

★ 今後に向けて

参加した子どもたちにアンケートをとったとこ

だ本につながることもあります。本と実体験は、車の両輪のようにどちらも必要です。私は、科学あそびをすることで、その両輪をつなげたいと思っています。

科学あそびの導入や途中の説明などで、実際に本の読み聞かせをし、いくつかのページを見せることもあります。また、子どもたちが自分でもっと調べ、詳しく知ろうとしたときに役立つよう、当日配るプリントの最後のページに複数の参考文献をのせ、家庭でも利用できるよう配慮しています。

こうして、本と実体験の間をキャッチボールのように自由に行き来することによって、科学の本での間接体験と、直接体験がつながって、相乗効果で本の魅力も直接体験の楽しさも、何倍にもふくらみます。「体験は育ての親」。「昔、図書館でやった科学あそびはこのことか」という体験のポケットをふやすことが、自ら学ぶ楽しさに結びつくと思っています。

これからも、体験と本を結びつけながら、子どもたちに寄り添って、共に、科学と本を楽しんでいきたいと思っています。

(さかぐち みかこ)

坂口氏プロフィール

「科学の本と体験のキャッチボールを」をモットーに、年間200回以上活動。科学読物研究会、仮説実験授業研究会「開楽クラブ」、子どもと科学をつなぐ会会員。おもな著書に『科学のふしぎ 1』（フレーベル館 1998）など。

ろ、「おもしろかった」「また参加したい」という答えがほとんどでしたが、2時間という開催時間の長さについては回答が分かれ、「ちょうどよい」が6割、「長い」が3割、「短い」が1割でした。子どもは年齢によって集中力や手先の器用さが大きく異なります。さまざまな年齢の子どもが、それぞれに楽しめる工夫が必要です。



日常のなかには、子どもに身近な科学の素材がたくさんあり、またそれらをわかりやすく説明している子どもの本も多くあります。これからも科

学あそびを通して、子どもと科学、科学の本を結びつけていきたいと思います。

(国際子ども図書館児童サービス課)



科学あそび 2011・国際子ども図書館

宇宙ってどんなところ? ～月の形が分かる早見盤をつくろう～

2011年7月30日(土)、31日(日)

よんでみよう本

【月をテーマにした本】

- ・『月』(宇宙のたんけんたい2)
フランクリン・M. ブランリー文 トゥルー・ケリー絵 的川泰宣日本語版監修 神鳥統夫訳 小峰書店 2005
- ・『月のかんさつ』(講談社パノラマ図鑑7)
木村直人文 講談社 1991
- ・『月をみよう』
藤井旭著 あかね書房 2005
- ・『つきのせかい』
フランクリン・M. ブランリーぶん ブラディミール・ボプリエ 山田大介やく 福音館書店 1968

【星をテーマにした本】

- ・『星空ガイド』2011
誠文堂新光[編] 誠文堂新光社
- ・『星めぐり』
ジョアンナ・コール文 ブルース・ディーギン絵 藤田千枝訳 岩波書店 1995
- ・『なつのほし』
かこさとし著 偕成社 1985
- ・『春・夏の星座』
小林悦子文 藤井旭写真 講談社 1992

【宇宙をテーマにした本】

- ・『藤井旭の天文年鑑』2011年版
藤井旭著 誠文堂新光社
- ・『宇宙をみたよ!』
宙野素子文 偕成社 1994
- ・『スペース・シャトル宇宙へ』
サリー・ライド、スーザン・オーキー文 上田悦子訳 偕成社 1992
- ・『ちきゅう』
G. プライアン・カラスさく・え 庄司太一やく 海部宣男監修 偕成社 2007
- ・『空のうえにはなにがある?』
マイク・マニングとブライタ・グランストロームさく せなあいこやく 評論社 2000
- ・『宇宙: そのひろがりをしろう』
加古里子ぶん・え 福音館書店 1978
- ・『太陽とわく星』
藤井旭文 講談社 1991

【原子をテーマにした本】

- ・『もしも原子がみえたなら』
板倉聖宣著 さかたしげゆき絵 仮説社 2008
- ・『原子・分子の発明発見物語』
板倉聖宣編 国土社 1983

近くの図書館でもさがしてみてね!

<ブックトークで紹介した本>

- ・『月をみよう』
藤井旭著 あかね書房 2005
- ・『月・大解剖』
藤井旭著 偕成社 2002
- ・『月へミルクをとりにいったねこ』
アルフレッド・スメードベルイさく ひしきあきらこ やく たるいしまこ え 福音館書店 1996

「知識インフラ」の構築に向けて 「第三期科学技術情報整備基本計画」の策定

はじめに

昨今、多種多様な電子的な情報がわたしたちの周りを駆けめぐっており、情報機器を通じて日常的にその情報を利用するようになってきました。科学技術分野における情報の世界においても、生産、流通、利用、保存のすべての段階で、電子情報資源は主要な役割を果たしています。国立国会図書館は、こうした電子情報資源をめぐる環境の変化に対応した取組みを行うため、このたび、「第三期科学技術情報整備基本計画」(以下「三期計画」)をまとめました。

三期計画策定の経緯

平成23年1月に開催された第52回科学技術関係資料整備審議会¹において、「国立国会図書館における今後の科学技術情報整備の基本方針に関する提言」²(以下「提言」)が国立国会図書館長に手交されました。提言では、昨今の電子情報資源をめぐる環境の変化をふまえた上で、国立国会図書館が今後果たすべき役割や取り組むべき事項が示されました。その内容を実現するため、国立国会図書館は、平成23年3月、平成23年度から平成27年度までの5か年を対象とした「第三期科学技術情報整備基本計画」を策定しました³。

三期計画策定の目的

提言によると、科学技術分野では、大きな資源

を集中的に投入して進められる研究プロジェクト、いわゆる「ビッグサイエンス」において、大量かつ多種多様な観測データや実験データを集積し、巨大なデータを処理・分析するための情報基盤が構築され、この基盤上で研究者間のデータと情報の共有が行われてきました。こうした共同研究、データ共有の傾向は科学技術分野全般で強まっており、さらに人文・社会科学を含む幅広い研究領域においても必要とされています。多様なデータ・情報を保存、管理し、それらを有機的に関連付けることで知識として活用し、別の研究活動や文化実践へとつなげていけるような基盤、つまり「知識インフラ」(次頁参照)を構築することが求められています。

三期計画では、国立国会図書館がこの「知識インフラ」の構築に積極的に関与することにより、科学技術情報をはじめとして、人文・社会科学分野も含む学術情報の収集・保存・提供機能を拡充・強化するとともに、他機関との連携協力を進め、

1 「科学技術関係資料整備審議会」は、平成23年11月1日、科学技術関係資料に加えて、科学技術情報の整備計画について調査審議するための「科学技術情報整備審議会」に再編された。第1回科学技術情報整備審議会の開催については、本誌31ページ「NDL News」参照。

2 http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/tec/council_tec_report.html

3 三期計画は、国立国会図書館ホームページ>国立国会図書館について>科学技術情報整備>科学技術情報整備に関連する諸計画 (http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/technology_info_03.html)に掲載している。

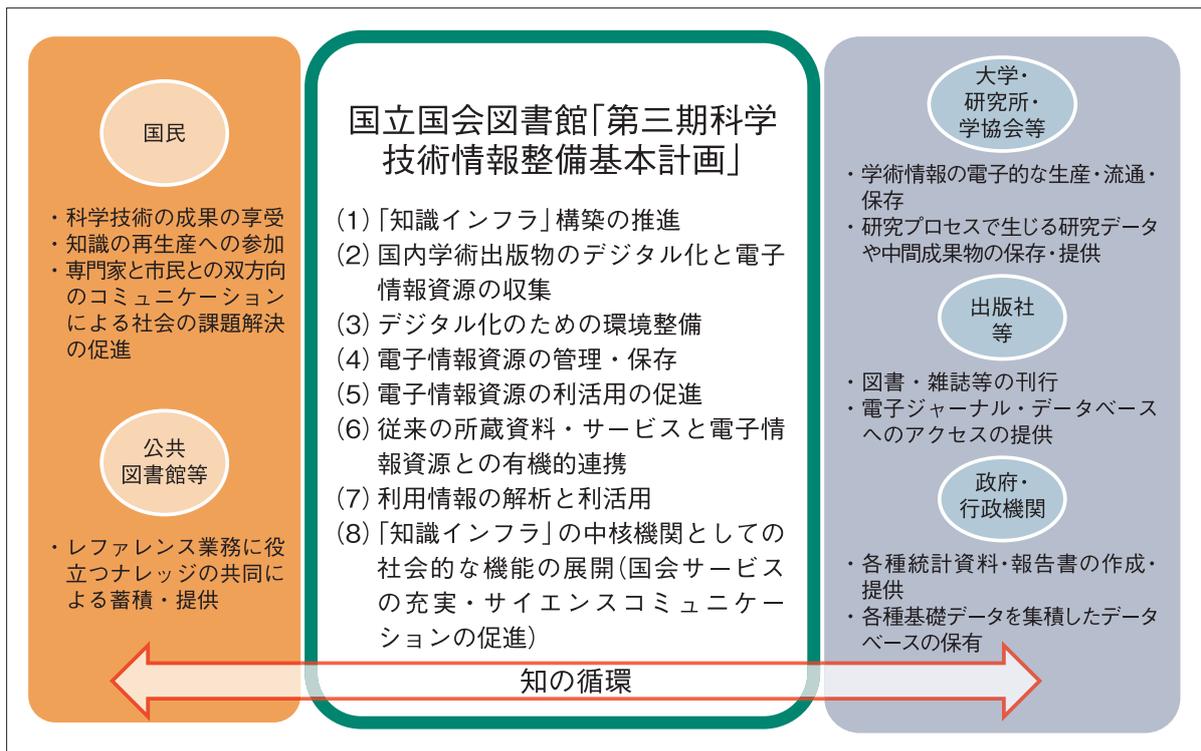


図 「知識インフラ」の構築に向けた国立国会図書館の役割

国全体の学術情報基盤整備に寄与することを目的として掲げています。

三期計画の柱

三期計画は、国立国会図書館が取り組むべき事項として、次の8点を挙げています。

- (1) 「知識インフラ」構築の推進
- (2) 国内学術出版物のデジタル化と電子情報資源の収集
- (3) デジタル化のための環境整備
- (4) 電子情報資源の管理・保存

- (5) 電子情報資源の利活用の促進
 - (6) 従来の所蔵資料・サービスと電子情報資源との有機的連携
 - (7) 利用情報の解析と利活用
 - (8) 「知識インフラ」の中核機関としての社会的な機能の展開
- 各項目のおもな内容をご紹介します。

「知識インフラ」構築の推進

三期計画の中心的なテーマは、「知識インフラ」の構築です。「知識インフラ」は、研究活動の過

程で生じる研究データから文献に至る多種多様な
学術情報全体を対象とし、テキスト、数値、音声、
画像、プログラム等の様々な形式のデータ・情報・
知識を扱います。それらの収集、保存、識別、組
織化、検索、表示、公開といった機能を有し、生
産から流通、アクセス・加工処理、再生産に至る
知識の循環を促進するネットワークおよびプラッ
トフォームの構築を目指します。当然のことなが
ら、国立国会図書館だけで構築できるものではあ
りません。前頁図に示すように、学術情報の電子
的な生産・流通・保存に関わっている大学・研究所・
学協会、図書や雑誌を刊行している出版社、各種
統計資料・報告書を作成する官公庁など、多くの
機関がそれぞれの役割を担い、連携協力する必要
があります。国立国会図書館は、「知識インフラ」
構築の中核機関として、電子情報資源の収集、保
存、提供を進めるとともに、関係機関との協議の
場の形成に向けた働きかけと調整を行います。ま
た、東日本大震災からの復興に向けた国立国会図
書館の取組みとして、震災と復興の貴重な記録を
保存し、後世に伝え、広く共有し、活用してい
ただくために「震災アーカイブ」（仮称）の構築に
着手します。「震災アーカイブ」は、ウェブサイト、
動画、SNS等のインターネット情報を含む多種多
様な震災の記録を収集・保存し、国内外から自由
に利用できる一元的な仕組みの実現を目指すもの
で、「知識インフラ」構築の先行的事業の一つと

位置付けています。この取組みは、平成23年11
月に三期計画を改訂した際に追加したものです。

国内学術出版物のデジタル化と 電子情報資源の収集

「知識インフラ」構築を進める上でも、これま
で国立国会図書館が進めてきた、所蔵資料のデジ
タル化や電子情報資源の収集は重要です。国内の
電子情報資源については、国立国会図書館法に基
づく法的枠組みのもと、国、独立行政法人等のイ
ンターネット資料を今後も着実に収集します。民
間が発信する電子書籍・電子雑誌等のオンライン
出版物の収集のための制度作りにも取り組みま
す。また、電子的に生産される学術研究の成果の
収集・保存においては、国立国会図書館が行う範
囲と関係機関が行う範囲とを明確にし、関係機関
と共同で国全体の学術出版物の収集・保存体制の
構築も目指します。

デジタル化のための環境整備・ 電子情報資源の管理・保存

国内の学術情報の電子的な生産、流通、保存が
効率的で持続可能なものとなるよう、国内の関係
機関との協力の促進、国内で流通する電子情報資
源のメタデータ基準の整備・普及といった取組み
も重要です。また、収集した電子情報資源を永続
的に管理、保存するための長期保存システムの構

築に取り組むとともに、長期保存のための調査研究を同様の課題をもつ国内外の関係機関と連携して進めます。

電子情報資源の利活用の促進

国立国会図書館のデータベース・システムを通じて、国立国会図書館だけでなく、他機関が保有

する電子情報資源についても求める情報に到達できるようにナビゲートします。特に、科学技術振興機構、国立情報学研究所といった国内の情報提供機関や図書館とは、積極的に分担・協力をを行い、国民の学術的な電子情報資源への容易なアクセスの実現を目指します。

国立国会図書館の科学技術関係資料

国立国会図書館は、国の科学技術情報基盤整備の一環として、科学技術関係資料の収集に努めてきました。所蔵している資料の種類と所蔵数は下表のとおりです。

洋雑誌や欧文会議録は、科学技術分野のものを中心に積極的に収集しています。利用も多く、洋雑誌の複写申込みのうち、約9割が科学技術分野への申込みでした（平成23年度上半期調べ）。

海外テクニカルレポートとは、研究機関等が行っ

た調査・研究の成果報告書のことで、昭和27（1952）年に収集を開始した米国政府の委託研究成果であるPBレポートなどがあります。国立国会図書館が科学技術情報に力を入れるきっかけともなった資料です。

出版物ではありませんが、「原子炉設置（変更）許可申請書」も所蔵しています。これは、各電力会社等から経済産業大臣に提出された国内の原子力発電所の設置および変更許可の申請書で、経済産業省から国立国会図書館に寄贈されています。

科学技術分野 和雑誌	36,200種(11,900種)*
科学技術分野 洋雑誌	30,000種(6,100種)*
欧文会議録	78,100件
海外テクニカルレポート	2,639,100件
規格	131,000件
学協会ペーパー	176,300件
国外博士論文	471,700件
国内博士論文**	547,051件
文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書等***	187,700件
原子炉設置(変更)許可申請書	1,700件

表 科学技術関係資料の所蔵状況（平成23年9月末現在）

*かっこ内は受入継続中のもの。
**人文・社会学分野を含む。
***厚生労働科学研究費補助金研究・事業報告書および循環型社会形成推進科学研究費補助金研究・事業報告書を含む。

従来の所蔵資料・サービスと 電子情報資源との有機的連携

これまでも国立国会図書館が行ってきた、納本制度による印刷物の収集には、一層力を入れていきます。その上で、印刷物と電子情報資源とを一体的に提供するための仕組みを実現します。つまり、情報資源の種別や形態を意識することなく、一括して探索できるナビゲーションシステムを構築し、求める情報にシームレスにアクセスできるような環境整備に取り組みます。また、国内の図書館等とは、レファレンス協同データベース⁴を通じて、レファレンス業務に役立つ知識、ノウハウを蓄積し、提供する事業を引き続き進めます。

利用情報の解析と利活用

これまで研究者や出版者から提供を要望されてきた、利用された資料に関する情報、利用者の情報探索行動に関する情報などの利用情報の分析、活用、提供に向けた調査および検討を行います。利用情報を活用する際には、個人情報や個人の利用情報の保護を厳守します。

「知識インフラ」の中核機関としての

社会的な機能の展開

国会サービスの充実のため、国政課題に関連する科学技術分野の調査を実施し、国会に的確に提供します。館外の研究者との連携を強化し、国会

と研究者コミュニティとの連携に資する施策を実施します。また、サイエンスコミュニケーションの促進に向けて、各種イベントの開催、適切な広報を行います。

おわりに

「知識インフラ」の構築については、平成23年8月に閣議決定された国の第4期科学技術基本計画においても、「研究情報全体を統合して検索、抽出することが可能な「知識インフラ」としてのシステムを構築し、展開する」と言及があります⁵。国の計画には、ほかにも、資料の電子化およびオープンアクセスの推進、科学技術コミュニケーション活動の推進といった、三期計画に掲げた内容と関連のある事項が示されています。国立国会図書館は、国全体の科学技術の発展のためにも、三期計画の着実な実施に向けて、各種の事業に取り組んでいきます。

(利用者サービス部科学技術・経済課)

4 国立国会図書館が全国の図書館等と協同で構築している、調べ物のためのデータベース (<http://crd.ndl.go.jp/>)。
5 第4期科学技術基本計画中「IV基礎研究及び人材育成の強化 4国際水準の研究環境及び基盤の形成 (3) 知識研究情報基盤の整備」(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/detail/__icsFiles/afiedfile/2011/08/19/1293746_02.pdf)

科学技術情報流通の裏方

私たち、科学技術・経済課企画運営係は、科学技術情報整備審議会（本誌23～27ページ「知識インフラ」の構築に向けて」参照）の事務局といった、科学技術情報の整備計画に関わる仕事のほか、国内の科学技術情報の流通を促進するための業務として「科学技術論文誌・会議録データベース」（<http://rnavi.ndl.go.jp/kaigi/>）の維持・管理も行っています。このデータベー



スは、国内の諸団体が発行する科学技術関係の学術論文誌などをNDL-OPACよりも詳細に検索できるものです。電子ジャーナルや発行機関のウェブサイトなど、関連する電子情報へのリンクもあります。そして最大の特長は、科学技術関係の学会等の会議録に関する情報を調べられることです。

会議録には最新の研究成果が発表されることが多く、科学技術分野ではよく参照される資料ですが、発表形態が多岐にわたり、特に論文誌等の一部として掲載された場合などは探しにくく、利用者の方からよくお問い合わせを受けます。例えば「形の科学シンポジウム」の会議録は、NDL-OPACをシンポジウム名で検索しても見つかりませんが、「科学技術論文誌・会議録データベース」で検索すると、雑誌『形の科

学会誌』『Forma』に掲載されていることがわかります。

では、このデータベースを維持・管理するためにどのような作業をしているかといいますと、科学技術分野の雑誌などに目を通し、関連情報をチェックし、専門的な単語がずらりと並ぶ中から会議録情報を拾い上げ、黙々と入力する。とても地道な作業です。

このような作業を積み重ねて、平成23年12月末現在、タイトル数約1万2千、会議録データ数約3万件を超えるものに成長しています。地味なデータベースですが、科学技術情報の基盤整備の一端を担っているデータベースであると自負しています。会議録をお探しの際は、ぜひ使ってみてください。

（科学技術・経済課企画運営係 エピタフ）

本屋に ない本

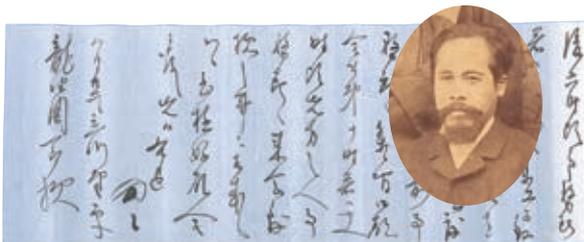
国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。ここでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

最後の民権政治家 立川雲平

田川五郎著 立川昌介刊 中央公論事業出版制作
2011.5 248頁 20cm <請求記号 GK136-J26 >

安政4（1857）年、淡路島に蜂須賀藩の足軽の子として生まれた立川雲平^{たつかわうんべい}は、洲本の藩校を経て徳島師範学校に学んだ。しかし家の事情で、中途退学を余儀なくされ15歳で小学校の教員となった。明治8（1875）年旧師である伊藤聴秋との出会いから自由民権運動に目覚め、京都へ遊学。当地で再び教職に就き、漢学を学ぶとともに、岸田俊子、小室信介などの民権派の人々と交遊関係を深めた。その後、放浪の旅を経て故郷の民権結社に参加し、本格的に自由民権運動に関わるようになる。当時、民権運動に奔走する人は「壮士」と呼びならわされたが、彼らは富や名誉は眼中になく、主義思想に殉じて行動する一方、力に訴えて自らの主張を押し通そうとする面もあった。遊説に仕込み杖やピストルを携行する者もあり、議会開設後の選挙では、壮士を駆り出したの暴力選挙も繰り広げられた。

上京して明治法律学校に入り、代言人試験に合格した雲平は、信州佐久での事件を依頼されたのがきっかけで、同地で演説会を開くようになった。そして雲平を崇拜する地元の青年龍野周一郎の懇請に



立川雲平書簡 龍野周一郎宛 明治25年8月22日（部分） および
立川雲平（明治20年11月三大事件建白之際於東京撮影部分）
<請求記号 龍野周一郎関係文書 128-3、346 >

より、佐久への移住を決心した。龍野は後に自由党遊説員として活躍したが、「先憂亭後楽」という芸名の講談師でもあった。当時の民権家にとって弁舌は不可欠の武器であり、各地で開催される政談演説会は政府の厳しい取り締まりにあいながらも、活気に満ちあふれていた。

明治23年、初の帝国議会選挙に佐久の素封家の支援を受け、自由党派から出馬した雲平は地元出身の有力候補と争った末に落選。第2回総選挙では当選し、議会で政府の選挙干渉を厳しく追及したが、次の選挙では再び落選し、以後10年間雌伏の時を過ごした。明治37年の第9回総選挙で再び咲くと、国会で政府の社会主義思想に対する弾圧政策を批判して、言論、出版の自由を擁護する論陣を張ったが、疑獄事件に巻き込まれて、明治42年に政界を引退した。以後大連に渡り弁護士を開業、市会議長としても活躍したが、ここでも反戦活動をしていた共産党員の弁護に奔走するなど「最後の民権政治家」にふさわしい生き方を貫いた。

本書は、立川家と縁戚関係にある著者が、立川家に残されていた雲平の手記を素材にしながら、一人の民権政治家の生涯をまとめたものである。政府の懐柔策に翻弄される板垣退助などの民権家や壮士の人間群像とともに、雲平を『破戒』の登場人物のモデルとした島崎藤村を含む、佐久でのゆかりの人々との交遊関係が、生き生きと描かれている。当時と現在の政治文化を対比してみるのも興味深い。

（利用者サービス部政治史料課長 堀内 寛雄^{ほりうち ひろお}）



「函館の貴重児童資料」論集

「函館貴重児童資料の公開と記録集作成」実行委員会刊
2010.11 249p 26cm <請求記号 UG71-J60>

平成23年3月11日に発生した東日本大震災後、被災した地域の子どもたちや図書館などを支援しようと、絵本や図書の寄贈活動などが活発に行われている。

同じようなことが昭和9（1934）年の函館大火の後に行われたことを知る人は少ないだろう。

本書は、平成16年に市立函館図書館が函館市立中央図書館として五稜郭の新館へ移転する際、旧館の屋根裏（屋根裏文庫）から見つかった児童雑誌・図書に関する論集である。本書ではこの資料を「函館の貴重児童資料」と呼んでいる。

函館図書館の歴史は古く、明治40（1907）年に岡田健蔵が自宅を図書室として開放したことに始まる。岡田は函館市における図書館の設立と発展に尽力した人物で、西洋ろうそくの製造・販売に携わるうちに、産業の発展における図書館の重要性を認めたといわれる。明治42年に図書室は私立函館図書館となり、同時に児童サービスも開始された。これは日本の図書館史の中でも先進的な取組みであった。図書館はその後、昭和3（1928）年に市立函館図書館となる。

昭和9年3月、函館市では函館大火が発生し、市内の3分の1が焼失、多くの死者、罹災者が出た。図書館は必死の防火により火災を免れたが、家族や自宅を失った函館の子どもたちの悲しみは想像に難くない。

そこで当時図書館長であった岡田は、罹災児童を

励ますために全国の図書館を通して「罹災児童同情図書・雑誌」の寄贈を呼びかけた。その結果、全国各地から12万4,365冊の図書・雑誌が贈られた。重複も多かったが、中には旧満洲や台湾で発行され

た、現在では入手しにくいものも含まれていた。贈られた図書・雑誌の多くは罹災児童に配布されたが、一部は図書館の蔵書として活用された。そして理由は不明だが、明治期から同館が所蔵する児童雑誌と図書は1960年代に図書館の屋根裏に運ばれ、平成16年まで眠り続けたという。

本書は「旧植民地等の児童雑誌」「北海道の児童雑誌」「その他の児童科学雑誌」「児童図書」で構成されている。その論考の多くは日本児童文学学会北海道支部の機関誌『ヘカッチ』<請求記号 Z71-R190>で発表されたものである。

巻末には「函館児童雑誌コレクション及び北海道児童雑誌データベース」の入力リストと収録作品概要が掲載されている。これは前述の屋根裏で発見された児童雑誌を中心に、北海道文学館など道内の関連機関が所蔵する児童雑誌も収録したもので、インターネットで公開されている*。『台日コドモ新聞』など貴重な資料の解題と目次がある。昭和前期の児童資料を探索する際は、忘れずに調査したいデータベースである。

（国際子ども図書館資料情報課 見形 宗子）

* http://www.h-bungaku.or.jp/hakodate_jido_zasshi/



中国国家図書館との 第30回業務交流

平成23年11月8日～15日、国立国会図書館において標記の業務交流が行われた。中国国家図書館から、張志清副館長ほか計5名が来日した。

東京本館で行われたセッションでは、電子図書館分野を中心とする両館の最近の活動や、今後の展望・戦略が報告された。また、東日本大震災および2008年の四川大地震からの図書館の復興の取組み、古典籍資料のデジタル化をはじめとする電子図書館関係の取組みについての報告と意見交換が行われた。その後、関西館に場所を移して、懇談や施設見学を行った。

第1回科学技術情報 整備審議会



平成23年12月1日、東京本館において、第1回科学技術情報整備審議会が開催された。委員11名、国立国会図書館からは、館長ほか14名が出席した。新たな任期が始まる1回目の審議会であることから、委員長の選任が行われ、有川節夫委員（九州大学総長）が委員長に互選された。委員長代理には、有川委員長から倉田敬子委員（慶應義塾大学文学部教授）の指名があった。国立国会図書館から、平成23年3月に策定した第三期科学技術情報整備基本計画（本誌23～27ページ参照）の内容のほか、所蔵資料のデジタル化、インターネット情報の収集等、当館における電子情報の整備に関するおもな動き、予算の減少が続く科学技術関係資料費の現状と対応について報告した後、懇談が行われた。

懇談では、当館が取り組む「震災アーカイブ」構築について、個人が記録した動画の収集にも配慮する必要性や、民間の電子書籍、電子雑誌等オンライン出版物の収集について、電子情報は印刷物よりも消滅してしまう危険性が大きいと、国立国会図書館が収集、保存していくことの重要性が指摘された。外国雑誌（冊子）の価格上昇に伴う資料費の予算ひっ迫への対応については、利用動向にかたよらず国内の他機関の所蔵状況も考慮して収集するべきである、また、こうした外国雑誌の収集の分担においても、第三期科学技術情報整備基本計画が目指す「知識インフラ」構築においても、国内の関係機関との連携協力のための話し合いの場が必要であり早急に設定してはどうか、などの意見が出された。

審議会に関する情報は、国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）>国立国会図書館について>審議会・科学技術情報整備審議会（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/council_technology.html）に掲載している。



お知らせ

■ デジタル化した蔵書 26万5千冊が館内で 利用できるようになりました

1月6日、デジタル化した蔵書約26万5千冊が新たに利用できるようになりました。新たに提供を開始したものは、社会科学分野の雑誌約1,100タイトル*で、著作権の処理前のため、国立国会図書館の施設内のみでご覧いただけます（タイトルや目次の検索はインターネットでも可能です）。これにより、デジタル化した蔵書の提供総数は、約165万点（うち、インターネット上で提供するものは約29万点）となりました。今後もさらなる充実を図ります。どうぞご利用ください。

*デジタル化されているのは2000年以前に刊行されたもの。

○URL <http://dl.ndl.go.jp/>

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

>電子図書館>デジタル化資料（貴重書等）

○お問い合わせ先

国立国会図書館 関西館 電子図書館課 ネットワーク情報第一係

電子メール dl@ndl.go.jp

■ 「国立国会図書館 典拠データ検索・ 提供サービス (Web NDL Authorities)」 の本格サービス開始

1月6日に、「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス (Web NDL Authorities)」の本格サービスを開始しました。国立国会図書館の典拠データ*を一元的に検索・閲覧・ダウンロードし、ウェブ上のさまざまなアプリケーションやシステムで活用することができます。収録データは日次で更新しています。「国立国会図書館件名標目表 (NDLSH)」の新設件名についてRSS配信でお知らせする機能もあります。

本格サービス開始にあたっては、平成23年7月に公開した「開発版」へいただいたご意見をふまえ、検索機能の改善を行いました。ご協力ありがとうございました。

*図書館目録において検索の手がかりとなる著者名や主題キーワードの統一した形等を定めたもの。例えば著者名典拠を活用すれば、異なる形で表示された同一人物（団体）を網羅的に検索すること、同名で異なる人物（団体）の著作を区別して検索することが可能となる。

○URL <http://id.ndl.go.jp/auth/ndla>



お知らせ

■ 脚本アーカイブズ・シンポジウム 「失われた脚本・台本を求めて ～文化リサイクルの意義」

社団法人日本放送作家協会との共催により、脚本アーカイブズ・シンポジウム「失われた脚本・台本を求めて～文化リサイクルの意義」を開催します。

テレビ・ラジオ番組の脚本・台本の所在状況や保存方法等に関する調査研究等については、平成23年5月、国立国会図書館と文化庁が締結した協定の中で、当面の具体的な連携・協力を推進する分野の一つとして挙げられています。

入場は無料です。ぜひご来場ください。

○日 時 2月15日（水）13:30～17:00（13:00開場）

○会 場 東京本館 新館講堂（定員300名）

○プログラム（予定）

開会挨拶 長尾真（国立国会図書館長）

第1部 座談会「夢——脚本アーカイブズの、」

司会 堀川とんこう氏（演出家）

参加者 藤村志保氏（女優）、山田太一氏（脚本家）

中園ミホ氏（脚本家）、奥山侑伸氏（放送作家）

第2部 パネルディスカッション「デジタルアーカイブの潮流の中の脚本・台本」

司会 吉見俊哉氏（東京大学副学長）

パネリスト 木田幸紀氏（日本放送協会理事）、岡島尚志氏（東京国立近代美術館フィルムセンター主幹）、長尾真（国立国会図書館長）

来賓挨拶 近藤誠一氏（文化庁長官）

閉会挨拶 秋元康氏（日本放送作家協会理事長）

○お申込方法

ホームページの参加申込みフォームからお申し込みください。申込みの締切は2月8日（水）の予定ですが、定員に達した時点で受付を終了します。

国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）>イベント・展示会情報
URL http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/scripts_archives_symposium.html

または次の事項を明記の上、FAXでお申し込みください。

①イベント名（脚本シンポジウム）、②氏名（ふりがな）、③電話番号・FAX番号

○お申込み・お問い合わせ先

国立国会図書館 総務部 総務課 広報係

FAX 03（3597）5617 電話 03（3581）2331（代表）



お知らせ

■ 国際子ども図書館 春休み催物 「子どものための 絵本と音楽の会」

国際子ども図書館は、東京・春・音楽祭実行委員会との共催で、「子どものための絵本と音楽の会」を開催します。ヴァイオリンとチェロの演奏にあわせて、クロケット・ジョンソン作の絵本『はろると まほうの く に へ』の朗読を楽しむ会です。入場は無料です。

- 日 時 3月25日（日）13:30～、15:00～の2回（各回約30分）
- 会 場 国際子ども図書館 3階ホール
- 対 象 3歳～中学生およびその保護者（原則として子ども1名につき保護者1名） 各回100名（申込多数の場合は抽選）

○お申込方法

次の事項を明記の上、往復はがきまたは電子メールで2月29日（水）までにお申し込みください（必着）。①住所、②参加者および保護者の氏名（ふりがな）・年齢、③電話番号、④FAX番号（FAXをお持ちの方のみ）、⑤ご希望の時間

○お申込み・お問い合わせ先

東京・春・音楽祭実行委員会 「絵本と音楽の会」係

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング

電子メール event@tokyo-harusai.com 電話 03（3296）0600

ホームページURL <http://www.tokyo-harusai.com/>

お知らせ

■ 平成23年度 利用者アンケートの 結果をホームページに 掲載しました

国立国会図書館は、サービスの利用動向や利用者の満足度・要望を把握するために、来館利用者を対象としたアンケートと、遠隔利用者（電子図書館サービスや遠隔複写サービスなど来館せずに利用できるサービスの利用者）を対象としたアンケートを交互に隔年で実施しています。

平成23年度は、東京本館、関西館、国際子ども図書館の来館利用者を対象としたアンケートのほか、東京本館の一部の専門室で来室利用者を対象としたアンケートも実施しました。実施期間、配布・回収数は下表のとおりです。アンケートにご協力くださった方々に厚く御礼申し上げます。

アンケートの結果を参考に、サービスや業務の改善を図っていきます。

○URL http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/enquete2011_01.html

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

>国立国会図書館について>利用者アンケート

>平成23年度来館利用者アンケート結果

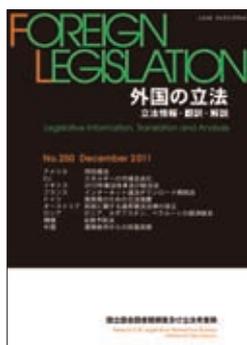
平成23年度来館利用者アンケート

実施場所	実施期間	配布数 (件)	回収数 (件)	回収率
東京本館	9/1～9/3 (3日間)	3,435	1,784	51.9%
関西館	8/12～8/27(13日間)	2,199	1,141	51.9%
国際子ども図書館 (18歳以上)	7/30～8/7 (8日間)	1,674	1,183	70.7%
国際子ども図書館 (18歳未満)		720	499	69.3%
東京 本館	科学技術・経済情報室	667	429	64.3%
	人文総合情報室	265	194	73.2%
	新聞資料室	753	544	72.2%

お知らせ

■ 新刊案内

国立国会図書館の 編集・刊行物



外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第250号 A4 227頁

季刊 1,890円 発売 日本図書館協会 (ISBN 978-4-87582-722-1)

<主要立法(翻訳・解説)>

- ・アメリカの州における同性婚法制定の動向
- ・EUにおけるエネルギーの市場自由化と安定供給—事業者分離をめぐって
- ・イギリスの2010年憲法改革及び統治法(1)—公務員
- ・フランスのインターネット違法ダウンロード規制法—著作権の保護と表現の自由の均衡をめぐって
- ・ドイツにおける脱原発のための立法措置
- ・財政に関するオーストリア連邦憲法法律の改正
- ・ロシア、カザフスタン、ベラルーシの経済統合—関税同盟条約を中心に
- ・韓国の自殺予防法
- ・中国における薬物依存からの回復政策



レファレンス 731号 A4 214頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

(特集: 英国の政治システムとその変容)

- ・英国型政治制度はなぜ普及したか
- ・動揺するウェストミンスター・モデル?
- ・英国の貴族院改革
- ・英国の政府提出法案の立案過程(資料)
- ・英国下院の議事日程改革
- ・英国における内閣の機能と補佐機構
- ・英国キャメロン連立内閣の政権運営
- ・英国保守党の組織と党内ガバナンス
- ・英国の政治資金制度(資料)



NDL CD-ROM Line 点字図書・録音図書全国総合目録 2011年2号

(1980年以前～2011年9月収録) 年2回更新

年間契約価格42,000円、初年度のみ63,000円(検索ソフト込み)

発売 日本図書館協会

参加館は245館(国立国会図書館、86点字図書館、158公共図書館等)。

収録レコード464,106件。

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

CONTENTS

- 02 New Year Greetings from Makoto Nagao, the Librarian of the National Diet Library
- 04 <Book of the month - from NDL collections>
Yamaji no shizuku : studies of early arms and armour in the Owari domain
- 06 Exhibition “Graphic Magazines in Meiji, Taisho and Showa Eras”
- 13 From Exhibition “Graphic Magazines in Meiji, Taisho and Showa Eras”
Modern printing technology (3) Three-color half-tone and four-color half-tone; photogravure; offset and HB process
- 16 Essay on languages (final) Dreaming of a universal language
- 18 Fun with science, events for children by the International Library of Children’s Literature
- 23 Aiming to build “knowledge infrastructure”
Third Basic Plan for the Development of Science and Technology Information
- 28 <Tidbits of information on NDL>
Background work of science and technology information distribution
- 29 <Books not commercially available>
○ *Saigo no minken seijika Tatsukawa Umpei*
○ *“Hakodate no kicho jido shiryō” ronshu*
- 31 <NDL News>
○ 30th mutual visit program with the National Library of China
○ 1st meeting of the Council on Organization of Science and Technology Information
- 32 <Announcements>
○ 265 thousand volumes of digitized materials released inside the library facilities
○ Full-scale Web NDL Authorities started
○ Scripts Archives Symposium “In Search of Lost Scenarios and Scripts: the Significance of the Recycling of Culture”
○ Spring event of the International Library of Children’s Literature “Picture Books and Music for Children”
○ Results of the user questionnaire survey FY2011 now available on the NDL website
○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成24年1月号 (No.610)

平成24年1月20日発行 定価 525円
(本体500円)

発行所 国立国会図書館
編集責任者 山田敏之
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03(3581)2331(代表)
FAX 03(3597)5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

発売 社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812(販売)
FAX 03(3523)0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 「刊行物」 > 「国立国会図書館月報」でご覧いただけます。



木村武山筆 「しめかざり」
『国際畫報』5(1) 大正通信社 1926.1
口絵(オフセット刷) 色紙(22×19cm) 貼込
<請求記号 雑35-209>

国立国会図書館月報

平成24年1月20日発行 (毎月1回20日発行)
(1月号通巻610号)

発売：社団法人 日本図書館協会 定価 525円(本体 500円)